

ザンビア・トンガ人社会における保険としての社会ネットワーク

-第1報-

石本雄大
総合地球環境学研究所

要旨

本研究では、社会ネットワークによる保険として世帯間のサポートに注目し、日常的サポートと臨時的サポートの2つに分け分析を行った。日常的サポートのうち、食料生産および食料消費における共同労働メンバーは、①いずれの活動とも近い血縁者が多いこと、②構成員の家屋は物理的に近いこと、③構成員は重複することが多いこと、④畜力利用はメンバー形成に大きな影響を与えることが明らかになった。臨時的サポートのうちモノの贈与は、①頻度および量が農作業の進行状況に伴い変化すること、②季節変化があること、③立地条件によっても傾向が変化することが明らかになった。

1. はじめに

半乾燥熱帯(SAT)の農村部に暮らす人々の家計は、生態環境による影響が大きく、農業生産量および所得が大きく変動する。SATに位置するザンビア南部州で同様の生活を送るトンガの人々は保険市場や公的社会制度へのアクセスが困難な状況下で生活している。本研究の目的は、社会ネットワークが保険としていかに機能するかを解明することである。ただし、調査は現在も継続中であり、本研究は予備的報告である。

2. 調査概要

調査地は、ザンビア南部州シナゾングウェ地域¹⁾の低平坦地に位置するサイトA、中間の傾斜地に位置するサイトB、高平坦地に位置するサイトCであった。いずれのサイトにおいても住民の大部分はトンガの人々であった。

調査方法は直接観察およびインタビューであり、一部は質問票を用いて調査対象者自身に記帳を依頼している。主な調査項目は、生業活動、食事といった日常生活における活動の構成員、モノ・金・行為のやりとりの量である。

3. 世帯間で機能する保険 -日常的サポート-

本研究では、社会ネットワークによる保険として世帯間のサポートに注目する。ここでは日常的サポートと臨時的サポートの2つに分け分析を行っていく。3章では日常的サポートを考察するため、食料生産活動、消費活動におけるメンバー構成を調査した。メンバー間の関係やその背景（血縁関係や居住地など）を分析する。

3.1 食料生産活動

本研究では、食料生産活動における日常的サポートを分析するために農耕および家畜飼養における共同作業の構成員に注目した。

作業により共同作業の行われる割合は異なるが、メンバー構成は重複していた。メンバー数が農作業で最も多い耕起作業、家畜飼養において最も多い牛放牧とは、特に重複している。この重複は、牛なし世帯が牛を借りるために、耕起作業や牛の放牧を手伝うので生じる。すなわち、畜力の利用が、メンバー拡大の契機となっている。

3.2 食料消費活動

食料消費活動に関しては、共住と共食のメンバーシップについて分析を行った。他の世帯と共に食料消費活動を営む割合は、サイト A で高く、サイト B で低かった。これは家屋の密集度と関係があると考えられた。また、共住世帯は共食をするが、共住していない世帯同士が共食を行うこともあることが明らかとなった。

3.3 日常的サポートの背景

日常的サポートの背景を理解するため、食料生産および食料消費における共同労働メンバー間の関係について比較分析を行った。①いずれの活動とも近い血縁者が多く、②構成員の家屋は物理的に近く、③構成員は重複することが多いことが明らかになった。ただし、一部の世帯では牛の欠如・不足が原因で、生産と消費の構成員は重複しない。すなわち、④畜力利用はメンバー形成に大きな影響を与えている。

4. 世帯間で機能する保険 — 臨時的サポート —

モノの授受は不定期に行われる。これらは、贈与、売買、貸借および労働への報酬などがある。本研究では、臨時的サポートとして贈与に注目する。季節、立地がもたらす影響に関して、世帯 E および F の 2 つの事例研究をもとに分析を行った。

4 章からの主な知見は以下の 3 つである。①贈与の頻度および量は農作業の進行状況に伴い変化する。それは、農耕が大部分の人々の主生業であるためである。従って、②贈与の頻度および量には季節変化がある。贈与は、播種期および収穫期に多い。③立地条件によっても贈与の傾向は変化する。特に、乾季畑に適した土地の有無は、それによって農耕期間に違いが出るため、贈与の傾向に強い影響がある。

今後は、居住地の距離および血縁関係の近さとモノのやりとりの関係について分析を進めていく。